

研究テーマ 入院患者における主体的目標と主観的QOLの関係

病 院 名 医療法人常磐会 いわき湯本病院

研 究 者 ○^{いなだ めい}稲田芽依(作業療法士) 武田裕吾(理学療法士) 丹野美沙(作業療法士)
渡邊菜月(作業療法士) 荻津明(理学療法士)

概 要

【研究背景】

リハビリテーションにおける目標設定には、患者の主体性が重要とされており、患者参加型の目標設定を行うことで、治療への関与の増大やQOLの改善がみられると報告されている^{1) 2)}。当院においても、患者の主体的目標を重視している。その中で、高い目標を持つ患者は、運動機能に関わらず主観的QOLが高い印象を感じていた。

【研究目的】

前回当院で確認した、VASによる主観的QOLの評価を用いて、IADL・参加レベルを目標とする患者とADLレベルを目標とする患者の関係を明らかにする。並びに、身体機能と主観的QOLの関係を明らかにする。

【研究方法】

当院入院中の患者のうち、同意が得られ、HDS-Rを最終項目まで実施でき、なおかつFIM認知項目20点以上の患者27名(男性10名、女性17名、平均 79.3 ± 12.9 歳)を対象とした。主観的QOLは「現在の満足度」を、20cmのVASを用い評価した。患者の主体的目標としては、ADL・IADLがイラストで描かれた17項目の中から、「達成したい事」を3つまで選択してもらった。その中で1つでもIADLに関する目標を選択した群をIADL群、3項目すべて基本動作やADL項目に関する目標を選択した群をADL群とし、2群間の主観的QOLとT検定により比較した。また、運動機能と主観的QOLの関係を明らかにする為に、それぞれの群において主観的QOLとFIMの関係性を、スピアマンの積率順位相関係数を用いて求めた。統計学的解析は有意水準を5%とし、ソフトはR-2.8.1を用いた。

【結果】

主観的QOLのVASは平均 11.2 ± 4.7 cmであった。主体的目標は、IADL群70.4%、ADL群29.6%であり、IADL群はADL群に比べ主観的QOLが有意に高かった。また、主観的QOLとFIMの関係は両群間に相関は見られなかった。

【考察】

今回、IADL項目の中には、患者が入院前に担っていた役割である項目や、社会参加の項目も含まれている。入院というライフイベントを経験したにも関わらず、自らの役割の再獲得を目標に掲げ、意識しているということが、主観的QOLに有意差がみられた要因の一つではないかと考える。今後は、主体的目標の変化とQOLの変化を経時的に追跡し、その関係性の確認を行っていきたいと考える。

【結論】

主体的目標に自らの役割を意識できるように介入することが、QOLの向上に有効な可能性がみられる。

【引用参考文献】

- 1) 尾川達也ら：目標設定における患者の意思決定の程度とADLや心理機能の変化量との関連性—Personal Goal モデルの検討—, 第49回日本理学療法学術大会
- 2) 尾川達也ら：患者参加型の目標設定の効果と意思決定過程における満足度との関係性, 第51回日本理学療法学術大会